

論文

ロールズにおける安定性問題

——不朽の自由——

堀 巖 雄[†]

I 序

ロールズの学問体系は、ハーバードでの担当科目に合わせて、大きく二つの構成要素から成ると見てよい。即ち道徳哲学と政治哲学である。本論考では、後者、政治哲学の全体構造を鳥瞰する。また、政治哲学として根本的に何が言いたかったのか、明らかにする。それが即ち自由主義の安定性問題なのである。それに付随して、二つの作業を行う。まず一つに、従来からの通説的ロールズ解釈を修正する。ロールズにとって何がより根本的な問題なのかを解明するために、この作業は不可欠である。二つ目に、『正義論 (A Theory of Justice)』に始まり最新刊『公正としての正義再説 (Justice as Fairness / A Restatement)』に至るまで、その安定性問題がどう扱われてきたか、その推移を解明する。それに伴い、所謂「ロールズ転向説」の核心に迫る。『正義論』と『政治的自由主義 (Political Liberalism)』の間で、何が、何のために修正されたのか、明らかになる。本論稿では、論旨を明確化するため、引用は極力脚注にて行う。

II ロールズの通説的解釈

① 通説の概要

従来の通説的ロールズ解釈では、とかく「合理的選択理論」の側面が強調されてきた。結論を先取りすると、この解釈はロールズの根本問題と独自性を共に見失う元凶であった。よってこの解釈を修正し、叩き台として根本問題の必然性に迫る。

通説の趣旨は次のようになろう。「正義の二原理は、原初状態で一意に合理的選択される、ただそれゆえに正しい。」即ち、「原初状態 (Original Position)」という、何らかの意味で道徳的根拠付けをもった前提の下での合理的選択解であるがゆえに正しい、というのである。即座に次のような反論が浴びせられる。「そのような仮説的状态における合意に、現実社会の我々が拘束される謂れは無い。なぜそのような絵空事にお伺いを立てなくてはならないのか。」と⁽¹⁾。これに返答するため、より根本的な方法論に遡って、原初状態の意義付けが行われてきた。ここで言われる方法論とは「反照的均衡 (Reflective Equilibrium)」だが、一部の解釈によると、ロールズは原理の基礎付けは放棄

[†] 早稲田大学社会科学部研究科 博士課程1年

し、自らの直観との整合でもって正統化を図っているのだ、ということになる。簡単に言ってしまうと、「なぜ従わねばならぬのだ。」という問いに対して、「思ったことを言ってみただけだ。」と居直ったことになるようにとれる⁽²⁾。

ロールズは、『正義論』において、いまひとつ「功利主義批判」も行っているわけだが、これについて、「ロールズ＝合理的選択説」では次のように解釈する。「それは原初状態という何はともあれ正統化された状態において機械的にはじかれるがゆえ、原理としてふさわしくない」と。そしてそれと別個に、「功利主義は、個人の効用を合成し、個別性を軽視するがゆえ、正しくない。」という批判があるとする。この両命題をつなぐロジックが探求されるわけであるが、直接「反照的均衡」に訴えた場合、次のようになる。「ロールズは、『個別性軽視』という自説を踏まえて、その直観を前提に原初状態を描いたのだ。よって暗にその批判は生かされているのだ。」と。

以上の解釈では、一貫して次のことが仮定されている。「原理は、ロールズの直観から演繹されてくるゆえに正しい。」という仮定である。それ以上に正しさの根拠はない、ということになる。あとはロールズの描写に我々が共鳴できるか否か、ということである。

通説に対しては、さらに決定的な批判が浴びせられている。「原初状態においては、二原理は採択されない。選ばれるのは、(平均) 功利原理だ。」⁽³⁾というものである。原理が直観から演繹されてくることはさておいて、その演繹結果自体が誤っていた、というのである。

② 通説の疑問点

通説では二つの点に疑問が残る。一つ目、「原理が直観から演繹されてくるゆえ正しい。」という点である。常識的に言ってこれは「正しさ、正統性」の主張・論証にはならないであろう。またいまひとつの倫理学方法論、「合理的直覚主義批判」にも抵触する⁽⁴⁾。「ロールズは居直り、それ以上を諦めたのだ。」と言ってしまえばそれまでである。ここで次のような反論があるかもしれない。「ロールズは直観だけでなく、倫理学・心理学・社会理論ともつき合わせている。」というものである⁽⁵⁾。しかし、自分にとって都合のよい理論を直感的に選んでくるだけであれば、結局これも「直観・直覚」に回収されることになる。

二つ目の疑問は、「ロールズが合理的選択に失敗した。」という点である。従来解釈によれば、ロールズは功利主義批判を前提にし、それを心に秘めて「原初状態」を描写したはずである。ならば、自らの原理が選ばれるように、好きなように記述すればよかったのではないか。それが誤っているとすれば、それは単にロールズが不注意だったということになるであろう。このような致命的な欠陥を残したまま『正義論』は堂々と出版され、以降30年あまり何度も機会があったにも拘わらず修正の無いまま今日を迎えたことになる。そしてこの点を不明確にしたまま『政治的自由主義 (Political Liberalism)』その他で別の論点に移行して行ったり解されている。

本論稿において、次の二つの問題を解消していく。①合理的選択の成否と位置付け、②原理の正統性はどこからくるか。

Ⅲ 原初状態論の成否

① ロールズの基本論理

従來說、そして大方の批判者の想定する議論の骨子は次の命題にまとめられる。「原初状態における合理的選択が二原理の正当性の根拠である。」これは、冷静に考えてみると不可解である。ロールズが勝手に描いた状況がなぜ正当性を主張できるのか、説明が欠けている。それとも元々ロールズは恣意的な発言をしているだけなのであろうか。

単刀直入にロールズの議論の根本論理を示すなら、実は次のようになっている。

「aを前提にすると、bが導かれる。cを前提にすると、dが導かれる。aとcを比較すると、eの基準に照らしてaが優れている。ゆえにそこから導かれるbが受け容れられるべきだ。」⁽⁶⁾ によってロールズの直観が介在するのはaとcの比較の局面だが、比較基準eが明示されるゆえ、われわれはそのロールズの判断を読み手の経験に照らして吟味することが出来る。直感的に正しい公理からの演繹、という点に正統性の根拠があるのではない。

功利主義批判の文脈に照らして具体的に空欄に情報を書き込んでみよう。2パターンある。パターン①対古典的功利主義⁽⁷⁾。「原初状態（情報制約により残される情報は原理の正当化に必要なもののみ）からは正義の二原理が導かれる。不偏の観察者（我々の生の情報に不偏性の拘束をかけただけ）を前提にすると、効用最大化原理が導かれる。原初状態と不偏の観察者を比較するとeの基準に照らして原初状態の方が優れている。よって正義の二原理が受け容れられるべきだ。」、パターン②対平均効用最大化

原理⁽⁸⁾。「原初状態 i（情報制約により残される情報は原理の正当化に必要なもののみ）からは正義の二原理が導かれる。原初状態 ii（不偏性の情報制約＋フォンノイマン基数効用関数）からは平均効用最大化原理が導かれる。原初状態 i と原初状態 ii を比較すると e の基準に照らして原初状態の方が優れている。よって正義の二原理が受け容れられるべきだ。」

以上がロールズの原初状態と功利主義批判に関する議論の論理である。自身の二原理の正当性は、功利主義原理との前提レベルにおける相対比較に基づくものである。原初状態をそれ単独で取り出した時に超越的に正しいわけではない。ちなみに相対比較により自身の二原理を支持する根拠は、『正義論』においては、ロールズの言葉で言うと公共性・最終性という機能を持つからなのである⁽⁹⁾。これらの機能を自身の原初状態の中で説明するのである。また原初状態をもって初めてそれが可能なのである。公共性とは原理が客観指標として個人間比較に資すること、最終性とは法体系に適用された時に安定性や一般性を担いうること、をおよそ指している⁽¹⁰⁾。功利主義原理は個人の選択原理を社会統合の原理に拡大適用するため、これらの機能を担えない。これがロールズの主張である。ただし原初状態内での原理導出の議論に不整合があるのでは、という疑惑はまだ残る。

② ロールズの意図

ロールズは何故このような議論を行うのか。実はこの議論の仕方こそ道徳理論としての「構成主義 (constructivism)」の目指すものである。方法論的批判対象は合理的直覚主義

である。それは次のように定式化される。①善・正といった基本的道德概念は、他の非道德概念には還元されない。②第一原理は道德概念の機械的適用により得られ、自明なものである。直覚主義は現世以外に道德秩序を想定し、我々は直覚によりそれを正しく認識することで何が正しいのか決めることが出来る、と考えている¹¹⁾。

対するロールズの構成主義は、道德原理をあの世の道德秩序でなく現世社会においてそれが果たす役割で評価する。ないし現存する政治文化・法・ルールの中から道德原理を紡ぎ出す。また善・正といった単一命題ではなく、それが前提している人格や社会の概念に注目する。ロールズが師と仰ぐカントのそれは自律的な人格概念に重きを置くが、ロールズにおいては人格概念に加えて「協働体系 (system of co-operation)」としての社会概念にも着目する¹²⁾。そして道德概念が社会において果たす役割は当該社会の公的政治文化の発展に応じて進化するため、そこから切り離しては論じえないと考えるのである。

結局原初状態や普遍的観察者といった観念は、道德が社会において果たす役割を個人の実践原理として表現したものなのである。そしてその機能を比較することで、付随する原理の優劣を決めようとするのである。

③ 合理的選択の成否

ロールズの方法論的意図は良しとして、それでもロールズの議論は内在的に整合性を欠いている、という批判がありえる。特に、合理的選択の過程に不備がある、という批判が消えたわけではない。本論稿の意図から逸れるため、

『正義論』から『公正としての正義再説』に至るまでのそれにまつわる膨大な議論を全て振り返ることはしない。別の機会に譲る。今回はその最新版のみ外観する。

③-1 第一原理が何か、について¹³⁾。ロールズは自身の平等な自由原理と功利原理を比較する。あくまでリストの中における相対比較である。自身の原理を支持する根拠は次の点にある。①選択当事者は、信託者が公的政治文化として自他を自由・平等な道德的人格と見なすことを知っている。ゆえに平等な自由原理でその確保をめざす。②功利を第一原理とした場合でも、その社会の一般的事実次第では自由が尊重されるかもしれない。③しかし当事者は「委託による緊張 (strain of trust)」から、信託者である市民の利益を危険にさらすことはしない。リストの中に「平等な自由原理」が存在し、利益確保が可能な以上、効用原理という迂回路によりリスクを犯すことはしない。(実はこのことをマクシミムルールと呼んでいる)¹⁴⁾

一応筋は通っているように思われる。しかし、次のような反論が考えられる。「ロールズは、選択当事者の合理性は道具的なもので、経済学のものと同様だと言ったではないか¹⁵⁾。しかし、以上の議論では選択者の合理性にロールズの勝手な思い入れが書き込まれているではないか。」というものである。この反論は、合理的選択と、当の批判対象である功利主義が混同されたものなのである。功利主義は、次のことを前提としている。「道德命題は、効用最大化という非道德的命題に還元できる。」ここで注意されるべきは、「効用最大化は善いことだ。善いことは効用最大化だ。」としてはいけないことである¹⁶⁾。それはトートロジーである。

「道徳的」原理は、「非道徳的」効用で説明されなくてはならない。片や「合理的選択」とは次のようにいえよう。「目的に対し最適な手段を選択すること。」経済学の文脈に落とせば、次のようになる。「効用最大化のために、最適な財を選択すること。」ポイントは、合理的選択理論における「効用」は、功利主義とは違って、恣意的に選べることにある。道徳的意味は問われない。道徳的かもしれないし、非道徳的かもしれない。ロールズが、選択者の選好に第三者から見て道徳的なものを書き込んだとしても「合理的選択理論」として何ら不都合はない。加えて、選択対象である「財」とは、ロールズにおいては「原理」である。「基本善(primary goods)」は、原理としてどの財がどの順序で選好されるか、という効用情報なのである。それと別に、基本財に対する効用情報があるわけではない。そして平等な自由原理は、「自由かつ平等な人格」の実現を直接的に、確率計算なしに確保できるがゆえに、まさにそうだからこそ望ましい、というのである¹⁷⁾。その人格も公的原理が担うべき機能の一つなのである。

③-2 格差原理(difference principle)について¹⁸⁾。ここにおいてもリスト中からの相対判断、という論法が力を発揮する。この原理も、選択リストを抜きにして原初状態から分析的に演繹されるものでは決して無い。また第一原理は前段の議論で確定されているので、ここでの比較はそれを前提にしつつ第二原理に限定される。対立候補は、第一原理はロールズと同様で、第二原理は格差原理に換えてソーシャルミニマム保証つき平均効用最大化原理とされている¹⁹⁾。

この比較判断が微妙なものであること、とりわけ現実政策上の含意においてそうであることを断った上で、あえて自身の二原理を支持する根拠は、次のようなものである。即ち、自身の原理は、「互恵的協働システム」という政治文化の中で育まれた理想の社会像によりマッチすると言うのである。つまり全ての人の利益になる限りで社会的不平等が認められるのだから、全ての人が社会参加に動機付けを持つであろう、ということなのである²⁰⁾。

ここにおいても、次のような批判が考えられる。「互恵」などと言う自分の好きな概念を勝手に選好に書き込むな、と。しかし、ロールズの言いたいことはむしろその逆である。政策上の含意が変わらないのであれば、より道徳的含意を多く含む原理が望ましい、と言いたいのである。

③-3 合理的選択の総括

以上見てきたように、ロールズの合意的選択はおおよそ成功していると見て良い。否、成功するように悪く言えば選択当事者の選好に周到に手心を加えているのである。そして、その選好にかなう、即ちより多くの道徳的含意を託された自身の二原理が、提出されたリスト中で相対的に優越する、というのである。結局合理的選択は、「説明の道具」的な意味しかもたない。即ち、彼の二原理が合理的だというとき、何に対して合理的なのか知らされねばならないのである。その「何に対して」の次元に、功利主義とロールズの分水嶺がある。ただ、効用に手心を加え、道徳的意味を持った原理を選ばせると言っても、現世では到底考えられないようなホラ話であれば、我々は受け容れ難いであろう。しかし、彼の二原理は、おおよそ合衆国憲法

のニューディール後の解釈を要約したものと思われるゆえ²¹⁾、その批判にはあたらないであろう。

④ 結局功利主義批判で言いたいことは何か

原初状態当事者の選好に書きこまれた情報、即ち公共性や安定性がロールズの原理と功利原理の分水嶺であることをみた。しかし一方でロールズは衡平な観察者やハーサニー版原初状態でも自身の原理は社会状況（一般的事実）次第で肯定されうること認めている。直接実践原理の中に書き込むのがロールズ、功利の秤にかけるといふ迂回路をとるのが功利主義者だといつてよい²²⁾。そもそも現実の功利をどうやって測るのか、という問題はさておき（決定的な問題だが）、ロールズは両者をなぜ区別したがるのか。現実社会の裁判を想起してみれば、およそ生の利益衡量で事を済ますことなどありえないわけだが、立憲秩序の最高原理ならどうか。実は両者の違いはルール・秩序・ロールズ用語で実践（practice）観にある²³⁾。功利原理は基本構造（権利・義務の体系）の第一原理に限らず、あらゆる道德問題に適用されるものである。全てのルールを功利という個人的選択原理の延長に見出そうとする。対するロールズは、あらゆるルールを実定法・慣習・条理・判例（これら総称して実践という）の解釈の中から見出そうとするのである。功利判断は一切行わない、というわけではない。ルールの体系の中で許される事例、範囲においてそれは用いられる。ロールズの問題とする基本構造の第一原理についても、個人の功利判断に丸投げされるべきでは無い。公共性や安定性など、既存の実践の中から盛り込まれるべき属性の要求が出されているのである。人の意思から規範を始めよ

うとするのが功利主義、ルールを意思に先立たせるのがロールズだと言ってよい。

因みにロールズが言う通説（俗説）的解釈によると、カントも、ルール・実践観において実は功利主義と同類なのである²⁴⁾。彼は功利原理でなく定言命法手続きだが、それが個人的選択原理であることに変わりはない。皆がその選択原理に従うとき、自動的に整合的な権利・義務体系が全社会において達成されると考えているのである。そんな保証がどこにあるのだ、と問えば、そこで神を呼び出してくるのである。

IV 安定性問題の位置付け

① 合理的選択から安定性へ

これまでの議論において、ロールズは二原理が合理的選択されるゆえに正しい、と言いたいわけではないことを見てきた。それでは自身の二原理はなぜ有難いのか、どういう目的に照らして合理的なのか、明らかにされねばならない。先の基本論理の定式化の中で、実は一箇所空欄にしておいたところがある。比較基準 e である（Ⅲ①）。ロールズが二原理に託した意義、政治哲学者としての主張そのものがここにある。多少厳密性を犠牲にして、思い切って表現するなら、次のようになろう。

e = 現代の公的政治文化を前提にして、どの原理が最も安定性を獲得できるか。

つまりロールズが原理の選択理由に書き込んだ基準は大きく二つのカテゴリーに属する。公的政治文化か、安定性である。逆にいうと、原理が不適切としてはじかれる時、理由は二つありえる。現行政治文化から乖離している場合か、安定性が劣る場合かである。

② 公的政治文化

公的政治文化は、単に一般的事実として受容しているものなので、次のように定式化される²⁹。1. 包括的教説の永続的な理にかなった多元性。2. 単一教説の強制は国家権力の発動をもってしか不可能。3. 政治体制は、民主制として、少なくとも過半数の人から、その多様な包括的教説内の視点で、支持が与えられなくてはならない。4. 政治文化の中には、正義構想をまとめ上げることに用いる、基本的直覚的概念が潜んでいる。即ち、二つの道徳的能力を持つ道徳的人格や、協働体系としての社会等のことである。

加えて、ロールズは政治哲学の課題自体が公的政治文化によってその時代ごとに変わるのだ、という³⁰。自分の課題も政治文化の中から拾ってきたということであろう。不偏的抽象的原理の下で共存ではなく、愛による連帯や超越的権力下での共存を是とする社会も在りうるが、それらは考察の対象外なのである。

③ 原初状態の中での安定性の位置付け

原初状態内における原理の比較基準について、先に功利主義との比較で公共性と最終性を挙げた。ロールズはそれとは別に『正義論』においてすでに安定性を打ち出していた。だが原初状態は第一部、安定性は第三部と、記述箇所が離れていたせいか、両者の入れ子構造は見過ごされたままに月日がたった³¹。また『正義論』では議論が錯綜していた。最新著『公正としての正義再説』では、原初状態内での比較基準が整理された。先に私があげたeとは一見異なる。彼が『再説』で挙げたのは、第一原理については「マクシミンルール」、第二原理につ

いては「①互恵性、②公共性、③安定性」である³²。第一原理の「マクシミンルール」は一見「安定性」と無関係に見える。しかし、「マクシミンルール」の根拠は「依託の緊張 (strains of commitment)」である。即ち、情報制約下の代表者に突きつけられた、情報制約解除後の社会における原理に対する支持確保という課題である。一方で原初状態内の当事者の選好全体がどうなっているかについても、『再説』では整理されている。その中の主要論点という形で抜き出すならば、以下ようになる。①無知のヴェールにより原理選択に不要な事実は排除される。②選択対象は渡されたリストの中に限られる。③基本善として、然るべき財を然るべき順序で選好する。④委託の緊張により、リスク回避的。⑤公的政治文化に潜在する諸概念を知っている。⑥原理の社会における機能を知っている³³。では功利主義との比較基準は、これら選好情報とどう関係するか。互恵性は⑤「公的政治文化に潜在する概念」であり、公共性は③「基本善のリスト内容」に反映されている。しかし安定性だけは⑥「社会における機能」、すなわち情報制約解除後の現実社会での運用局面に拘わる議論になっている。一般性や普遍性を担わされた当事者がどのようにその論証を進めるのか、難しい問題である。公共性や互恵性の自明性に比して、ロールズの教え込みの側面が強いといえる。なぜロールズがそれをモデル内の当事者に教えるか、それは他でもない、これこそロールズ構想に特有の、既存の政治文化に新たに書き加えんとするものだからである。彼の野望そのものなのである。

V 安定性問題の概要

①「安定性」の由来

ロールズは社会学や生物学のシステム理論にその着想を得ている。とりわけ彼が参考にしたのは精神科医のアシュビーのそれである⁸⁰⁾。アシュビーは、機械も生物同様目的適応的に行動できる、と考えた。しかも、その証明にあたり主観的な意識の概念を持ち出す必要が無いと考えた。ここで用いられる抽象的な機械に「システム」という用語を充てる。システムは、何らかの変数をとることで時間と共にその状態が変化することを記述できる。システムの変化の系列を「軌道」と呼び、外部環境においてシステムの変化を誘発する諸変数の束を「インプット」と呼ぶ。インプットに対して軌道が一義に対応するとき、「状態確定的」という。この確定的な状態が環境からの錯乱作用により他の状態に変異した場合でも、ある特有の軌道を通じてもとの確定的起動に回帰することをもってシステムが「安定的」という。ではロールズの世界における安定性とはどういうことをさすのであろうか。

② ロールズにおける安定性の意味

先のアシュビーの説明をロールズの理論に置き換えてみる。ただし自身が断っているように、厳密にはそれに従ってはいない。主要概念を拝借しているだけである。しかし論理に類似性はある。

まずインプットは「原理」である。そして確定する状態とは原理の下に組織される諸制度のことである。その制度下に暮らす人々の心に、「正義感 (sense of justice)」が育まれること

をもって、安定性が達成される。言い換えると、正義原理は自分の力で支持を取り付けねばならない。均衡から乖離させる錯乱要因は、エゴイズムや羨望等の感情である。それらに正義感打ち勝たねばならない⁸¹⁾。

ロールズにおいてはこれで終わりではない。心理学的に客観的事実として安定性が達成されても、それは我々が支持すべき実践原理、即ち原初状態において正当化されるに値するものではないかも知れない。つまり、その安定性はイデオロギー流布の結果かもしれない⁸²⁾。支配者が心理操作を行っているのかもしれない。客観的に見て皆に信じられているがゆえに正しい、という論証になるのは、システム論的論理を採用した場合に陥る共通の難点である。そこでロールズは最後の詰めとして、正と善の一致、すなわち正義感覚に従うことの善さを証明するのである。それが善いと思えるか否かは読者に委ねられる。(ロールズの行っている論証自体イデオロギーの産物？これ以上は問わない) まとめると、安定性論証は2パートに分かれる。①正義感の獲得と②善と正の一致、である。

VI 安定性の証明

① 正義感獲得

ロールズは、原理が施行される現実社会に住まう人々の心理に正義感が育つことをいかに証明するか。彼はピアジェ心理学理論に依拠する。人間の道徳性は成長に従って以下のように発展する、と見る。①権威の道徳性——家庭における親子関係から生じる、②結社の道徳性——小共同体での相互の役割理解により育まれる、③原理の道徳性——市民として抽象的原理原則に従うことができるようになる⁸³⁾。

以上のピアジェ心理学に、自身の正義原理をビルトインして自前の道德発達法則を仕立てあげる⁸⁴。第一法則——親が子の善に愛情をかけているとき、子は親を愛するようになる。第二法則——社会的取り決めが正しく、そのことが人々に知れているとき、同僚への仲間意識と責任感がお互いの義務の遂行を通じて育まれる。第三法則——社会的制度が正義に適っていて、そのことが公的に知れ渡っていれば、そのとき人々は正義感を獲得できる。

以上の三法則に照らして、例の如くに功利原理と自身の原理で相対判断を行うのが次の段階である。ポイントは「互惠」という観念である。これは三法則を通底している。即ち、愛してくれる親を信頼する、同僚が頑張っているから俺も頑張る、皆が従っている規則に俺も従う、ということなのだから。効用原理がこれを満たし得ないのは明白である。つまり、他者のより大きな効用のために犠牲になった人は、自尊を傷つけられ、もはや互惠は成り立っていないから⁸⁵。

ここで一つの反論が浮上する。ロールズは自分の原理に都合のよい心理学説を持ち出しているのではないか、というものである。ロールズは、対抗馬たる心理学説として、経験論者の中で支持されて来たサンクションによるものと、フロイトらの幼児体験に基づく学説を検討している⁸⁶。しかし、なぜ自分の説が優位なのか、明らかにしはしない。進化論によっていずれの心理学が優越するか決めることができることを示唆するのみである。この議論は、我々にとって採るに足らない、といえる。「この心理学説を仮定すれば、こちらの原理が相対的に優れている。」言いたいのはここまでであろう。しか

し、この曖昧さは後に問題となる。

② 正と善の一致証明

ロールズは、自身の二原理を受け入れることが、何ゆえ善いと言うのか。善さをどう説得するか。『正義論』では次のように列挙している⁸⁷。1. ロールズの二原理は公共性を持つ。功利主義者は、自身の選択原理をそのまま公共原理に採用する。ロールズの世界では二原理を受け入れず、自分勝手な原理にしたがってフリーライダーとして生きる事はリスクを伴う。他の皆は同一原理にしたがっており、一人の背反は顕現してしまう。2. アリストテレス原理によれば、秩序ある社会に参加することは最上善であり、人間本性である。その参加の道を、原理は保証する。3. カント的人格解釈によると、我々はそもそも自由・平等な合理的存在として自らを表現したがつているはずだ。これは原理に従うことで実現できる。

③ 安定性証明の問題点

以上の証明において、決定的な問題点がある。まず心理学説の選択が恣意的なことを先に挙げておいた。ピアジェやアリストテレスやカントに賛同しない人は多いであろう。ロールズ自身、そのことには充分気付いていて、自身の証明が決定的でないことは断っている⁸⁸。以上の論点は理論の不完全性・曖昧さを示すものである。しかし、より重要な、本質的な問題が潜んでいる。というのは、自身の推奨する、そして心理学説以前に前提されているのが「平等な自由原理」なのである⁸⁹。そして原理により保証される自由のリストの中で最上に位置するものの一つが「思想の自由」なのである。思想

の自由が至高のものとされる社会で同一心理学説が皆に奉じられる。この矛盾は深刻である。何とかしなくてはならない。このジレンマを解決するため、ロールズが採った策はいかなるものか。

VII 「転向」の真相と安定性の改訂

① 重なり合う合意 (overlapping consensus) の登場

この問題の解答としてロールズが導入したのが「重なり合う合意」の概念である。即ち、政治構想は「自由支持観念 (free-standing view)」とし、いかなる根拠をもって支持を与えるのか、各包括的教説 (comprehensive doctrine)、即ち哲学や宗教各自に委ねられるのである。理由・動機は異なれど、同じ政治構想を支持しているから、「重なり合う」合意なのである。これはたまたま偶然が重なったことによる利害の一致、即ち「暫定協定 (modus vivendi)」とも違う。「暫定協定」下の人々は、条件次第では、ないし自身の利益に適うと見たらいつでも体制を覆す用意がある。しかし「重なり合う合意」の場合、支持は永続的・安定的である。そして自身の安定性証明、及び『正義論』自体を、政治構想に支持を与える一包括的教説に格下げしたのである⁴⁰。しかし、自分の見解が誤っていた、と考えたわけではない。だから教説が真であることと「理に適っている (reasonable)」すなわち皆が対等な立場で受け容れうることの区別を行い、自説は「理に適わない」とするのである。こうすることで『正義論』の記述は温存される。一つの政治構想に対し、カントやアリストテレスといった包括的教説がそれぞれの仕方支持を与えるのである。

加えて諸教説のなかで全体として自説が相対的には最も「理に適っている」とまで言うのである⁴¹。あくまで完全ではないが。

② 心理学改訂

『正義論』で展開された改造ピアジェ心理学に替えて、『再説』では「理に適った」つまり超党派の心理学が展開される。当然、これは包括的教説に属するものでなく、政治構想の一部として皆に共有されることが想定されている。以下のようなものである⁴²。①市民は善構想と正義原理に従う能力を持つ。②制度が正しく公正なとき、市民はそれに従う用意がある。③他者が明白な意図をもって公正な秩序に服しているとき、市民は彼に対する信頼・信用の感情を持つ。④協働の仕組みが長く堅持されるに従って、信頼・信用の情も強固になると同時に、公的政治生活への理解が深まる。⑤皆が近代民主社会の歴史的社会的環境（前出）を共有していることを悟るようになる。⑥資源の希少性・協働からの利益理解するようになる。——かくして暫定協定として始まった社会生活は協働の枠組みとして発展し、重なり合う合意を得るまでになる。

③ 善と正の一致証明の改訂

「重なり合う合意」概念導入によって、善と正の一致証明も別バージョンが求められることとなる。『正義論』における証明は、先に見たように、次のような論法を採っていた。「～を信じる人にとって、自分の構想は～の意味で善い。」つまり、アリストテレスやカントを信じる人に各個個別に善と正の一致を説いていたのである。しかし、「重なり合う合意」は、次の

ような形態の証明を要請する。「多様な包括的教説が政治構想に各々独自の仕方です持与えつつ共存することは、～の意味で善い。」ロールズが～にはめ込んだ解答は、以下のようなものである⁴⁹。①政治構想に用いられる人格構想に訴えるもの。一つ目、そのような政治社会は、正義感と善構想という、二つの道徳能力を肯定する。二つ目、市民相互そして自分自身に対する尊重を政治社会は表明している。②互恵的協働体系としての社会概念から引き出されたもの。即ち政治社会は市民が相互に認め合えるような原理にしたがって行動したいという願望に込める。

人格構想、協働社会概念が政治文化として妥当か否か、それは我々が判断すべきことである。

VII 結論 ロールズの到達点

ロールズは「転向」により、理論の体裁を捨て、自由の原理と政治構想そのものを守った。そのために『正義論』の位置付けは犠牲にした。即ちそれが包括的教説（思想・宗教）であることは認めた。しかし、原理とそれを支える政治構想は教説でなく厳然たる「事実」としてこれを死守した。

彼の学問的動機は何か。事実には訴えること、「形而上」の世界でなく、あくまで現実に照らして話をしようという態度は初期から一貫している。我々の現実の経験に照らして検証できる倫理学を目指したのが『正義論』であった。

(II②④)

彼の政治構想の特徴は何か。自身も言うように (PL, intro), ギリシアに代表される古代小共同体のミクロコスモスと、現代における多元

共存社会の調停を図った、というのがぴったりこよう。対立を孕んだ多元社会でも安定性は達成されうる。また敵対する価値観がはびこる多元社会も考えようによっては自身のものとして肯定しうる。彼の野心性は、この安定性という概念にまざまざと現れている。(IV③)

思想・宗教の多元性、資源の緩やかな希少性、自由の原理を知っている（法体系の中に組み込んでいる）こと、これら事実は特にアメリカに限られたものではないであろう。その前提の下で、ロールズが重厚な議論でもって支え、護ろうとしたその対象は、正義原理と人格・社会構想という、限りなく抽象的なものである。この政治構想の抽象性は、彼の厳格な問いの立て方と、安定性確保という野心の代償であろう。しかしロールズが勝手にそうしたのではない。公的政治文化が彼にその課題を突きつけたのである。また、その正義は国際・地域社会・私的結社・家族レベルには適用されない。争いの絶えないこの多元社会で、最小限の絆を懸命につなぎとめようとした、といえよう。

[投稿受理日2001.10.31/掲載決定日2002.1.19]

略号一覧

- TJ : Rawls, J., *A Theory of Justice*. revised edition, Harvard University Press, 1999
- PL : Rawls, J., *Political Liberalism*. Columbia University Press, 1996
- CP : Rawls, J., Samuel Freeman (ed), *Collected Papers*, Harvard University Press, 1999
- RE : Rawls, J., Erin Kelly (ed), *Justice as Fairness: A Restatement*, Harvard University Press, 2001
- LP : Rawls, J., *The Law of Peoples: with "The Idea of Public Reason Revisited"*, Harvard University Press, 1999

注

- (1) Ronald Dworkin, *Taking Rights Seriously*, Harvard University Press, 1977, pp. 150-159, 邦訳『権利論』, 木下・小林・野坂訳, 木鐸社, 1986, pp. 197-210, ただしドゥウォーキンはこの後でその解釈が誤りであることを述べるのだが。
- (2) Rorty, R., 1988, "The Priority of Democracy to Philosophy" in *The Virginia Statute for Religious Freedom: Its Evolution and Consequence in American History*, M・D・Peterson and R・C・Vaughan (eds.), Cambridge University Press, 1988, 邦訳「哲学に対する民主主義の優先」, 『連帯と自由の哲学: 二元論の幻想を超えて』, 富田恭彦訳, 1988, 所収
- (3) Arrow, K. J., "Some Ordinalist-Utilitarian Notes on John Rawls' Theory of Justice" in *The Journal of Philosophy* 60, No. 9, 1975.
- (4) Rawls, J., "Kantian Constructivism in Moral Theory", in CP, pp. 343-346, also PL, lecture III
- (5) Daniels, N., "Reflective equilibrium and Archimedean points", in *Justice and Justification*, Chapter 2, ただしダニエルズはこの後本論稿の結論に近づいていく。彼は構成主義とは言わないが。
- (6) TJ, pp. 137-138, 「哲学者の中には、倫理的な最初の諸原理はあらゆる条件付の仮定からは独立であるべきである、つまり概念の分析によってこれらの概念から引き出されてくる論理的その他の真理以外のいかなる真理をも認めるべきではない、と考える者もいた。道徳的概念は、あらゆる可能な世界で成立すべきなのである。さて、この見解は道徳哲学を天地創造の倫理学研究にしてみよう。』, "Kantian Constructivism in Moral Theory", in CP, p. 305 「私の提示しようとするカント的見解において、正義構想を正当化する条件は政治的理由付けと公的文化のなかでの理解の基礎が打ち立てられたときのみ効能をもつ。」
- (7) TJ, § 30
- (8) TJ, § 27. 28
- (9) TJ, pp. 153, 「本節では、私は正義の二原理に関する主要な議論の若干を与えるために、公共性と最終性という条件を用いる。』, p. 20f, 「功利主義の議論は、近年、調整問題と公共性関係の問題に移ってきた。』
- (10) 『再説』では「安定性」で統一される。
- (11) "Kantian Constructivism in Moral Theory", in CP, pp. 343-346
- (12) "Kantian Constructivism in Moral Theory", in CP, では道徳的人格概念の使用が強調されている。p. 323, 「カント教説を特徴づけるのはその三つのモデル構想を解釈する特有の仕方である。とりわけ特徴的なのは、いうまでも無く、理にかなっていて、合理的で、完全に自律的な人格構想である。』, 『政治的自由主義』では人格概念と社会概念の相補関係が強調される。p. 104, 「(構成) 手続きそれ自体は出発点では社会・人格の基礎構想, 実践理性の諸原理, そして正義の政治構想の公的役割を用いることで単純に設計される。』, p. 107 「実践理性の諸原理と社会, 人格の諸構想は相補的である。』
- (13) RE, § 27, 28
- (14) 従来マクシミルルールは専ら格差原理の説明であると考えられてきたが, 『再説』でそのことが否定された。これはむしろ第一原理の説明のために持ち出されたのである。むしろ彼は『正義論』で格差原理とマクシミルルールが無関係であることを銘記しなかったことを後悔している。RE, p. 96, 「第一比較 (第一原理にまつわる比較) は、不確実性下における意思決定のためのマクシミルルールのガイドラインを用い、平等な権利・自由を支持するのに全くもって決定的である。しかし、これらのガイドラインは、格差原理の支持に寄与するところは殆ど無い。」
- (15) TJ, p. 124, 「ここでの合理性という概念は、一つの基本的な特徴を除けば、社会理論に馴染み深い標準的なものである。』, p. 123, 「彼らは (原初状態当事者) 自分の善概念を知らないとも仮定してきた。』 こうした記述だけ読むとこのような批判に繋がる。しかし, 『正義論』においてすでに、自身の用いる効用の性質について誤解無き様、次のように断っていた。TJ, p. 489, 「(ワルラスの言葉の引用) 我々の理論では、各取引者は、自分の好きなように自己の効用曲線、あるいは欲求曲線を決定すると仮定されるであろう。』, 『再説』では①最終目的を確定できる。②目的に対し最適な手段を選択できる。の2点に整理された。RE, p. 87
- (16) 以上は功利主義理解としては特殊なものである

- る。TJ, § 84
- (17) TJ, pp. 138-139, 「公正としての正義は、通常理解されているように、正義に関する理念をより直接にその最初の原理に組み込む。一中略—当事者は、不確実で投機的な保険統計的な計算がどうなるかに自由を依存させるよりも、むしろ基本的自由が確実に得られる方を選好すると思われる。」p. 160, 「当事者は、いわば、全ての可能な利益に対する生のままの潜在性を持つ人というより、むしろ確定した利益を持つ人なのである。」
- (18) RE, § 34
- (19) RE, p. 120
- (20) RE, p. 129
- (21) ロールズの原理が社会民主主義や福祉国家の正統化に役立つという見解は怪しく思われる。ロールズ自身そういった見解に目くじらを立てて反論しないが、例えば、Hayek, F. A., *Law, Legislation and Liberty: Volume 2: The Mirage of Social Justice*, p. 183 など。現実の福祉国家は諸社会保険サービスと公的扶助政策の複合体である。不平等矯正が第一義にあるわけではない。またそもそも二言三言の原理の文言でもってそれらが正統化された、されなかったなどと論じることはナイーブかつ陳腐である。加えてロールズの原理は不平等への異議申し立てと同時に不平等正当化にも使えることが忘れられてはならない。最も有名な事例はアダム・スミス『国富論』、第一篇、第8章。格差原理の両方の使い方の実例を見ることが出来る。
- (22) TJ, § 29
- (23) Rawls, J., "Two Concepts of Rules", in CP
- (24) "Kantian Constructivism in Moral Theory", in CP, p. 339, 「さて、公正としての正義は社会に然るべき優先を与えることを強調しよう。一中略—対照的に、カントの定言命法の説明は、誠実・良心的個人の日常生活における私的格率に適用される。一中略—彼は、この手続きが正確に実行されれば、最終的に社会正義原理を含む整合的・十全な完成された原理体系を産む事になる、と考えていた。」、以上はロールズが俗説に従った上での議論である。彼はカントが公共性にも気づいて、配慮していたことを示唆している。TJ, p. 115f
- (25) Rawls, J., "The Domain of Political and Overlapping Consensus", in CP, pp. 474-475, 以上は最終確定版。『正義論』ではヒュームの「正義の環境」から資源の緩やかな希少性と利害の対立に、相互無関心を加えていた。TJ, § 22
- (26) Rawls, J., "The Idea of an Overlapping Consensus", in CP, p. 421, 「政治哲学の目的はそれが宛先とする社会に依存する。」
- (27) TJ, p. 119, 「正義の概念の一つの重要な特徴は、自らへの支持を産み出すことにある。その諸原理は、それらが社会の基本構造に具体化されている時に、人々がそれに対応した正義感を獲得し、その原理に従って行為したいという願望を育てる傾向を持つようなものであるべきだろう。この場合には、正義の概念は安定的である。この種の一般的情報は、原初状態において許されている。」、TJ, p. 125, 「人間心理の一般的事実と道徳的学習の原理とは、当事者が検討すべき関連事項である。もし、正義の概念が自らへの支持を産み出しように無い、あるいは、安定性を欠いているというのであれば、この事実は見過ごされてはならない。」
- (28) RE, § 27, § 28, § 35, § 36, § 37
- (29) RE, Part III
- (30) TJ, p. 400f
- (31) TJ, p. 124, § 69, RE, p. 181, p. 185
- (32) Habermas, J., *Legitimationsprobleme in Spätkapitalismus*, Suhrkamp, 1973, 邦訳『晩期資本主義における正統化の諸問題』, 細谷貞雄訳, 岩波現代選書, 1979, pp. 109-118, ロールズ自身の説明は、TJ, § 86, 「問題は、正義の立場を取ろうとする規制的愿望が、情報について何ら制約の無い皮相的理論に照らして検討される時、自分自身の善に属するかどうか、ということである。」つまり、原初状態というモデル内とその外の現実社会での視点の違いに基づいて、善・正の一致証明は正義感証明から区別される。
- (33) TJ, § 69 § 70 § 71 § 72, の要約
- (34) TJ, pp. 429-430, 初版では家族・共同体レベルも正義原理で規制されることになっていた。後に、自身の正義原理は政治的領域に限られるという論点の強調と共に改訂された。RE, pp. 196-197
- (35) TJ, § 76, RE, § 38
- (36) TJ, pp. 401-402, 経験論者とはベンサムらのこ

と。人間は外部からの規制・規律により道徳性を習得する，というもの。ロールズはこれを否定するわけではない。

³⁷⁾ TJ, § 86

³⁸⁾ TJ, p. 436,

³⁹⁾ "Justice as Fairness: Political not Metaphysical", in CP, p. 414f, 「(『正義論』の安定性証明を反省して) また公正としての正義の安定性説明は，その文脈で描かれたような重なり合う合意の重要な事例に，そうすべきであったにも拘わらず，発展させられなかった。—中略— 4章32—35節の良心の自由の議論の観点から，重なり合う合意の事例への発展は本質的である。」，

⁴⁰⁾ CP, p. 179, RE, p. 184, においてこう言い切る。

"The Domain of Political and Overlapping Consensus", では政治構想と包括的教説を区別しながらも『正義論』が包括的教説とまでは言わない。

⁴¹⁾ PL, pp. 52-54, "Kantian Constructivism in Moral Theory", in CP, pp. 340-341

⁴²⁾ RE, § 59

⁴³⁾ RE, § 60